

生意気な女王様を 性奴隷に堕としてみた

2013/10/25

Var. 1. 04

シナリオ…燻製ねこ

サークル名…ケチャップ味のマヨネーズ

「プロローグ

（今風な垢抜けた格好の女性がうざそうに話す）

「うん・・・なあに？」

「さつきからうるさいと思ったら、私に話しかけてたの？」（うざったそうに）

「・・・」

「うん、気付かなかったよ？」

「・・・なんで、って・・・逆におまえ、なんで私と会話できると思ったわけ？」

「・・・おまえって言うな、って？　じゃあ、なんて呼べば満足なの？」

「・・・えつ、ち、ちよつと何！？　もう一回言って！？」（笑いを堪える）

「・・・」

「ぶつ、ふふ、あはははははっつっ！！　ごつ、『ご主人様』って！

やだ、ツボに入っちゃった！おまえが、ご主人様って、あつははははははっつっ！」

「・・・え、何怒ってんの？　・・・まさか今の、本気だったわけ？」

「いや・・・本気とか、普通に引くんだけど・・・」

「また、『なんで？』が出たよ」

「なんでも何も・・・じゃあおまえ、自分がガマガエルを『ご主人様』って呼ぶプレイ想像してみなよ。ゾツとするでしょ？　ちょうど今、そんな感じ」

「・・・俺はガマガエルじゃない、って？　似たようなもんでしょ」

「・・・そう？　・・・じゃあ、丁度そっちの壁が鏡になってるから、並んでみよっか。

服は着たままでいいから、ほら」

「・・・」

「鏡の向こうに2人いるよね。右側の芋臭い奴、どっちか解る？　そう、おまえ。で、左にスタイル良くて可愛い子がいるでしょ。あれが、私」

「それじゃ、価値を比べてみようか」

「・・・まず、顔ね」

「私は、アイドルじゃないのが不思議な位じゃない？おまえは・・・ふふつ、とても芸能人のオーラはないよねえ」

「・・・ボディラインにはもつと差があるけど」

「こんなに解りやすい、努力した・してない体のサンプルってそうはないよ。保健の教科書に『これがヒトの男女です』って載ってたなら、教室中大笑いだよね」

「・・・特に私の、すらっと伸びた脚とかさ、どう、凄いでしょ？　おまえ、最初に部屋入ってきた時から、チラチラチラ・・・盗み見てたよねえ」

「・・・」

「嘘つき、見てたよ。・・・シたくてたまんないの？　ヘンタイ」

「・・・さてと。じゃあ、鏡に向かってもう一回言ってみて？ 『ボクがご主人様です』、
って」

「・・・」

「うわつ、ホントに言った。ダサッ。分不相応って言葉知ってる？」

「・・・まあいいや、呼んであげるよ、“ゴシュジンサマ（※露骨な棒読み）”。
これでいいんでしょ」

「・・・」

「感情が箒（こ）もってないって？ そりや、箒（こ）めてないもん」

「・・・」

「もう気付いてると思うけど、私、生粋（きっすい）のSなんだ。本来はおまえみたいなグズを追いついで、イジメ倒すのが生き甲斐なの」

「でもそういう仕事に就くには、まずMとしての経験を積まなくちゃいけないんだって」
「・・・」

「そう、SM倶楽部のM嬢ってやつ」

「普通なら店で何ヶ月もM嬢の経験積むらしいんだけど、そんなの耐えらんないからね。
とにかく短く済む方法で、って店長にお願いしたの」

「その交換条件として仕方なく、2週間だけ貸切でM調教を受けてあげるってわけ」
「・・・」

「ただ、調教師がおまえじゃあね・・・」

「服従どころか、ビンタして唾吐きかけたくなるもん」

「つくづく店長を恨みたい気分だけど。でも“これ”に慣れといたら、ブ男への免疫ができる、って事かな」

「・・・」

「あれえ、ご立腹ですかゴシュジンサマ？ ブサイクな顔がますます魅力無くなってるよ」

「・・・」

「言っとくけど、私のこの評価は、すべての女の子を代表しての言葉なんだからね。おまえが優しいママから言われなかった事を、ハッキリ指摘してあげてるの。怒るどころか、むしろ感謝して欲しいんだけど？」

「・・・」

「おお怖。ま、いいや」

「そろそろ始めてもいいいよ。私の言葉責めでズボン膨らませちゃった、

ゴ・シュ・ジ・ン・サマ？」

（馬鹿にしきった調子で）

「それで、最初は何するの？」

「・・・」

「キス？」

「へえ、生意気にも手順踏んでくるじゃない。童貞臭いから、いきなり『おっぱい揉ませて』とか来るのかと思ったけど」

「ま、そんな事言ったら金玉蹴り潰すけどね」

「・・・じゃあ、キスさせてあげるけど、その前に。ちゃんと歯を磨いて、口内ケアしてるよね？」

「・・・」

「本当に？ おまえに女の子へのエチケットが備わってるのか微妙だけど、その3倍は気をつけてよ」

「・・・」

「そう、3倍。だって、私が相手なんだよ？ 見れば解るだろうけど、私、学生の頃は学年で一番モテてたんだから。私がもし『キスしていい権利』なんて出したら、男子の間で殴り合いの争奪戦が起きたと思うよ」

「そういう相手とキスできるんだって事、よく意識してよね」

「・・・」

「意識した？ ・・・それじゃ、はいどうぞ」（キス待ちの体勢に）

「・・・」

「・・・んっ、んんっ・・・。んちゅ、っちゅっ・・・ん、ふん、んむっ・・・」
（キスの音&息遣い）

「・・・ん、んっ！？・・・んんんっ！！」（やや息苦しい様子に）

「・・・っふはっ！」

「はあっ、はあっ・・・！」

「・・・どうだった、って・・・おまえが童貞っていうのがハッキリしたよ」

「・・・」

「そ、下手すぎ。必死にリードしようとしてたみたいだけど、かえって痛々しいだけ。滅茶苦茶に口の中舐めてるかと思えば、せっかくこっちが舌絡ませようとしても逃げろし。キスって、舌動かせば良いってモンじゃないんだから」

「・・・」

「ふふ、ミジメな顔。・・・怒るのは勝手だけど、その分時間なくなっちゃうよ？」

「2週間で私をM嬢として仕込むように言われてるんでしょ」

「・・・」

「ん、何よ・・・急に立ち上がった」

「・・・」 (ズボンやトランクスを脱ぐ音)

「なるほど、そろそろ勃起してたまらなくなってきたの？」

「・・・ふうん。大きさは、まあ人並みじゃない。1人遊びしすぎて、無駄に色黒だけだね」

「・・・」

「なに、指で持ち上げたりして？ ひよっとして、私に奉仕しろっていうの？」

「・・・」

「はあ。まさかこんな男の、死んだミミズみたいなアレを触る破目になるなんてね。・・・契約だから、この2週間『だけは』してあげるわ！」

「・・・」

「ふん、先っぽの皮を剥いただけで反応しちゃって。そんな事で大丈夫なの？」

「・・・さあ、たっぷりと唾をかけてあげる。ローションよりよっぽど高価な、私の唾液よ」

(唾液を垂らす。粘り気のある音)

「今度は、その唾液を塗り込んで・・・ちよっと、じっとして」

(粘り気のある、竿全体を扱うような音が続く)

「どう、唾液塗れのまま“あそこ”を扱(しご)かれる感覚は？ 気持ち良さそうねえ、ゴシュジンサマ」

「・・・」

「男の弱点なんて、もうみんな知ってるんだから。ある程度勃起してきたら、こうして指先で鈴口(すずぐち)を弄(も)くり回す(いじくりまわす)のが効いてくるんだよねえ？ 玉袋の方も握ってあげる。ころころ、ころころ中で転がって・・・ふふん、昂ぶって(たかぶって)きたんでしよう」

「・・・」

「ほら、私の指の中で、どんどん硬くなって、反り返ってきてる・・・。男って昂ぶった(たかぶった)反応が丸見えだから、ミジメよねえ」

「・・・」

「じゃあそろそろ、次の段階。こうやって指の輪っかで、先っぽから根元まで・・・“啜(すす)えこんで”あげる」

「あははっ、たった一回で足が震えてるじゃない」

「でも、しょうがないよねえ。並大抵の女の子の膣内(なか)より、よっぽど気持ちいいからね、これ」

「ゴシュジンサマには特別に、両手でもしてあげる」

「・・・」

「ほおーら、ひとつの輪っかが降りていった後に、また強さの違う輪っかが追いかけてくるでしょ？」

「どんなに経験豊富なホストだって、この『指まんこ』には3分ともたないんだから」
(粘り気のある音が速めに連続)

「あははっ、ゴシュジンサマあ、内股になってるよ。声もなんか、か細いし。さっきまでの自信過剰な態度は、どこ行っちゃったのかなあ？」

「・・・」

「ふふっ、その顔！ 全然睨めてないよ。完全に、レイプされた女の子の顔じゃない！ ほらあ、何この手は？ 私の腕を止めようとしてるわけ？」

「いいじゃない。私の手のひらの中で、気持ちよく射精しなさいよ。それすら、おまえには過ぎた幸福なのよ」

「・・・」

「え、なあに。扱く（しごく）のはもういいから、しゃぶれっ？」

「まだオスの心が残ってるのねえ、せめてフェラでイきたいの？」

「・・・ふっ・・・可愛そうだから、聞いてあげるわ」

（粘り気のある音が一旦止む）

「すごい。指を離してもまだ、びくんびくん脈打ってる。指で弾いた（はじいた）だけで射精しそうねえ。先走りだって、もうドロドロに・・・」

「・・・」

「ん？ 弄ばず（もてあそばず）に早くしろ？」

「馬鹿ねえ。おまえがそうやって待ちきれない様子だから、焦（じ）らしてるんじゃないの」

「サディストってね、相手が弱みを見せると、その傷口を穿り（ほじくり）返したくなる人種のことを言うの」

「・・・」

「ああはいはい、今はM嬢のお芝居中でしたよね、申し訳ございませんでした」

「じゃあゴシュジンサマ、この口の中に迎え（むかえ）入れてしまいますから、くれぐれも心臓麻痺を起こさないでくださいね？」

「・・・」

「あ、むっ」（啜え込む）

「・・・ん、んっ・・・じゅるっ、じゅるるっ・・・ちゅくっ、じゅぶっ・・・」

（この間フェラチオ 10秒ほど行う）

「・・・じゅるっ、じゅるっ・・・ちゅ、ぴちや・・・ちゅくっ・・・んっ・・・」

「ぶはっ」

「・・・ふふ、どうかなさったんですか、ゴシュジンサマ？」

「フェラチオしてる間中、視界の端で足がブルブル震えてるのが見えましたけど。汗も、びっしょり」

「・・・」

「すごい気持ちよかったって？ 当たり前でしょ、おまえなんかとは経験が違うんだから」

「ほら、こうして先っぽをつかんでもちあげて、裏筋を・・・えろっ・・・強めに舐めると・・・れろ、れろっ・・・」

「これだけでおちんちんの中に太い針が生まれるみたいなんでしょ？」

「・・・れろっ、ちゅくっ・・・ちゅぱっ・・・」

「じゅるっ、じゅるるっ・・・ぴちやっ・・・じゅぶっ、ちゅくっ、じゅぶっ・・・」

(この間フェラチオ 10秒ほど行う)

「ちゅっ・・・れろっ・・・ずるるっ・・・じゅぶ、じゅぶっ・・・ずるるっ・・・んむっ、んんあっ・・・」

「じゅぶ、じゅぶっ・・・ずずっ、ずっ・・・ずるるるるっ・・・」

「・・・ろう、ひもちいいの？きろうをしやうらえるのあ？」

(※どう、気持ちいいの？亀頭をしやぶられるのが？と舐めながら演技。上目遣いのイメージ)」

「・・・れろっ、れろっ・・・じゅるっ、ちゅぱっ・・・ふん、もう本当に限界ギリギリって感じね」

「・・・」

「・・・もつと深く咥えろって？ いやよ。自分が苦しむ事はしないの」

「おまえみたいな童貞は、先の方だけをしやぶられて空中にぶちまけるのがお似合いよ」

「さあ、じゃあラストパート・・・」

「うむっ・・・ん、ちゅっ、じゅぶっ、じゅぶっ・・・ちゅっ・・・ちゅ・・・」

(この間フェラチオ 15秒ほど行う)

「・・・んっ、はあっ・・・んむっ、ちゅっ、ちゅっ・・・ぴちやっ・・・じゅぼっ・・・ずるるっ」

「ちゅぶっ・・・ちゅっ・・・ん、んっ!？」

(※咥えながら、何か異変に気付いた声)

「あゝっ、ち、ちよっほ、やえっ・・・!？」 (※ちよつと、やめて、と咥えながらの演技)

「んごっ、おゝえっ! えゝおっ、ごえっ! んんゝごおゝおゝおええっ!」

(※以下イラマチオ 30秒ほど。)

無理矢理のイラマチオであるため、喉を狭めながらの、濁ったえづき声での演技が基本。とにかく不慣れ、かつ苦しそうに。啞えこむ演技の随所に『吐きそうな咳き込み』の演技が入っていると、一層リアルかと思われる。

同時に粘り気のあるストローク音もしている)

「げおっ、もお おお おえっ!? . . . ごおっ、おぐっ . . . ごはっ、ごあっ!」

「. . . んん お、おおお おお えっ . . . え えごっ、あはっ . . . けはっ!」

「. . . もごっ、おえっ! れお . . . おげっ . . . ぶはっ . . . 」

「お、え ごお っ . . . ごえっ!」

「も え っ . . . ごっ、も っ、ごおおおお えっ . . . ごえっ、おえ っ、お
ごおおおっ!」

「. . . ぶぶっ、え はっ . . . あ っ . . . がほっ、えあ っ . . . んぶっ、ごお
おおえ っ!」

「. . . んっ、お え っ . . . お え、えあ っ . . . あはっ、があっ . . . っほ
お おお え っ、ごおえあっ!」

「おお っ、ほごえ っ! ほお、おお っ . . . んあ おお、 んん ごおお
お . . . お おええ っ . . . !」

「. . . おおお えっ . . . ん、ん!? . . . んん ん っ!」

(射精音)

「. . . ん、ぐっ . . . !」 (口の中の精子に苦しむ声)

「んっ . . . んんっ! ! !」

「ん . . . 」

「っ . . . 」

「ん . . . おえ . . . 」

「. . . んっ . . . ん . . . 」

「. . . 」

「べっ!」 (男性側に向けて口内の精子を吐きかける)

「はあはあ . . . はあはあ . . . 」

「. . . ふん、ブサイク面(づら)に精子直撃ね」

「無理矢理口の中で出した挙句に、ニヤけながら人の顔覗き込んでるからよ」

「どう、自分の精子の匂いは? おまえみたいな下衆(げす)には、それがお似合
い . . . 」

(激しく頬を叩く音)

(片頬を押さえている感じで)

「・・・えっ・・・なに、あつ、い・・・？」

「・・・っ・・・!!」

「あ、あんた・・・ひっぱたいたの、この私を・・・!？」 (素に戻ってるので『あんた』呼び)

「よ、よくも、よくもっ! あんた今自分が、どれだけ大変な事したか解ってるのっ？」

「絶対許さない・・・覚えてなさいよ! 私のファンの男全員に連絡して、袋叩きにしてやるから!!」

「全員に頬殴らせて、この千倍、1万倍、顔の形が変わるぐらい・・・」

「再び、激しく頬を叩く音」

「・・・あゝっ!」

「・・・い、いったいつて!・・・何なの、さつきから!？」 (苛立った、ややヤンキーじみた声色)

(さらに激しく頬を叩く音。間を空けながら、数度連続で)

「きやあああっ!」

「・・・い、痛い・・・ホントに痛いつてば・・・」

「・・・あんた今、本当に最低な事してんのよ・・・？」

「・・・」

「お、女に手を上げちゃ駄目なんて、そんなの、マナー以前の常識じゃない・・・」

「だって、卑怯でしょ! 私は女なんだし、一応は男のあんたに暴力振るわれたら、勝ち目ないんだから!」

「・・・あ、そうだ。言ってなかったけどこの部屋、カメラで監視されてるんだよ？」

「こんな私をバシバシ叩いてる所撮られても、平気なのかなあ？」

「・・・」

「な、SMって・・・そんなレベルじゃないでしょ!」

「・・・」

「はあっ、男の顔に精子吐きかけた罰!？」

「それを言うなら、無理矢理奥まで咥えさせてきたそっちが・・・!」

「・・・」

「・・・ああもう、解った、解ったつてば!・・・なんかおまえ、目つきがヤバイよ・・・」

「・・・」

「・・・本当、なんであんたみたいなのが相手なんだろ・・・」

「2週間なんて、さっさと過ぎればいいのに」

3. 鞭・ろうそく

「・・・はあ。やっぱり、今日もおまえなの？」

「パンパン顔叩いてくるからクビにしてって言っただけなのに・・・何してんのよ、店長」

「・・・」

「しょうがないから、今日もおまえのSMごっこに付き合っただけ。今日はどうしたいの、暴力童貞ボウヤ？」

「・・・」

「服を脱げ？ 駄目。パス」

「・・・」

「ふざけるな？ 別にふざけてないって、本気」

「いい。私のこのカラダはねえ、超一流の売り物なの。それをおまえみたいな俗物（ぞくぶつ）に拝ませて、腐らせたくないわけ」

「・・・」

「何その手、またぶつの？ あくまで暴力で弱い女の子を従えるつもりなんだね、ホント最っつっつ低！」

「どうせ、私の前の彼に凄まれたらビクビクするだけの癖にさ」

「・・・」

「はいはい、解りました。・・・脱ぐから、ちょっと目瞑っててよ」

「・・・」

「当たり前でしょ！？ プレイの為に裸になるのは一万歩譲ってアリだとしても、脱いでるところまで見られる筋合いはあ・り・ま・せ・ん」

「職権濫用もいい加減にしなよ」

「・・・」

「解ったら、さっさと目瞑って」

「・・・」

「しつかりね。私が終わって言うまで、絶対に目開けないでよ？」

「・・・」

「はあ・・・ったく」

（衣服の擦れる音）

「・・・はい、終わり」

「・・・じろじろ見ないでよ。ヘンタイ」

「・・・それで、ここからどうすんの？」

「・・・縛る？ あっそう。・・・せめて上手に縛ってよね」

（縛る音）

「終わった？」

「・・・ちよつと、後ろの手首が痛いんだけど。下手くそ」

「・・・」

「ん、おまえ何持ってるの、鞭？」

「ふうん。手だけじゃ飽き足らず、道具でもぶとうってわけ」

（鞭の音）

「くうっ！」

「・・・」

「気持ちいいか、って？ んな訳ないでしょ。かなりイラッと来るんだけど」

（再び鞭の音、連続で）

「ぐっ、うんっ！ くうっ、 あああああっ！」

（気が強い娘なので、基本は悲鳴を堪えようとする。が、耐え切れず叫ぶイメージ）

「・・・」

「・・・はっ、はあっ・・・おまえ、力の加減まで下手ね。私の珠のお肌が、赤くなってるじゃない」

（再び鞭の音）

「ひいっ！」

「・・・はあ、はあ・・・か、感じるか、って・・・そんなんで感じる訳ないでしょ。ジンジンして痛いだけ！」

「・・・」

「他の方法も試してみる、って？」

「・・・」

「・・・うっ・・・ちよつと、それプレイ用の低温ロウソクなんでしょうね？」

「・・・」

「どうか、っっておまえ、ふざけてんの！？ 少しでも火傷させたら、タダじゃすまないから！」

「・・・っ・・・」（ロウソクが近づき、息を呑む間）

（ロウソクが垂らされる）

「ひゃあっ！？ あっ、あゝっっっ！！！！」

「もっと体から離れたところから垂らしなさいよ！」

（さらにロウソクが垂らされる）

「あ、あづっ！ ちよつと、オッパイ熱いって！ そんな何滴も・・・うううゝっ！」

「・・・はあ、はあ・・・」

「え、涙・・・？」

「当たり前でしょ、あんなに熱いの体のあっちこちに垂らされたら、誰だって涙ぐらい出るってば！」

「・・・」

「はっ！？ もっと泣け、つて、おまえ・・・！！」

「・・・っ！？」

「こ、この上また鞭でぶつつもり？」

(鞭の音)

「はあああああゝうゝっ！！！！」

「・・・はあ、はあ・・・はっ・・・はあっ・・・」

「い、痛い、ホント痛いつてば・・・！ ロウソクの熱さがまだ残ってるのに、そこに鞭なんて・・・」

「・・・」

「何ニヤついてるのよ、おまえ・・・」

「か弱い女の子がこれだけ嫌がつてんのよ。少しは何か感じる事はないわけ！？」

「・・・」

「汗まみれで涙流してるのが、面白い・・・？」

「・・・く、くううつ・・・！ おまえみたいなグズが、この私にそんな態度取っていいと思ってるわけ！？」

「・・・」

「何よ、またロウソクに鞭？」

「・・・」

「身体中をロウ塗（まみ）れにした後に、鞭で全部叩き落してやる？」

「・・・そんなので、私がどうにかなる訳ないでしょう。やれるもんなら、どうぞ」

「ブタみたいにみつともなく息切らせて、空しく鞭を振るってるがいいよ」 (※強がるが、若干怯えを含んだ声色)

「・・・」

「ふん、そうやって床を叩いてみたって、脅しになってないよ。

大した迫力もない“調教師もどき”の責めになんて、何も感じないんだから！」

(以下、鞭で打たれるたびに叫ぶ)

「ひっ！ ひぎっ！ うぐっ・・・ ひい！ ひっ！ うぐ・・・」

「いゝっ！ あっ！ ひい！ ひぎっ！ ひい！ ひいっ！」

「ひぐっ！ ひい！ うぐ・・・ ひぐっ！ ひいっ！」

(※以後、鞭の音と呻き声がしばし続きながらフェードアウト)

4. アナル

(水中から顔を引き上げる音)

「つぶはっ！」

「・・・はあっ、はあっ、はっ、はああっ、はあっ・・・!!」

「はあはあ・・・お、おまえもつくづく拷問じみたプレイが好きね」

「はあはあ・・・どれだけ水責めすれば気が済むの？」

「背中で腕を縛って、身動きできないようにして、水攻めとか、私を殺す気？」

「ひっ！」

(再び顔を水に沈める)

「(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)・・・」

「(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)・・・」

(顔を引き上げる音)

「つぶはっ！」

「はあはあげほっ！・・・はあはあはあはあ・・・」

「顔面コンプレックスこじらせて、私の崩れた顔を見るのが生き甲斐になったみたいね」

「・・・」

「そうだ、って開き直る辺りがホント最悪」

「おまえの始めな高校生活が目には浮かぶよ。私みたいなクラスのアイドルを、毎日視界の端で追っかけてたんでしょ」

「それでその子の上履きの匂い嗅いだり、リコーダー舐めたりしながら、妄想でひとり空(むな)しく慰(なぐさ)めてたんじゃないの？」

「ああ、可哀想。・・・もちろん、その餌食になった女の子が、だけど」

「いっ」

(再び顔を水に沈める)

「(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)・・・」

「(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)(ぶ)・・・」

(顔を引き上げる音)

「・・・ぶはっ・・・はっ、はあっ、げほっ・・・げほっ、えほっ・・・!!」

「従順になるまで、責め続けようっての？ なら残念、私を殺すしかないよ、それ」

「おまえみたいな奴に屈服するなんて、私のプライドが許さないから」

「・・・」

「何よ、黙り込んで。猿の脳味噌で捻(ひね)り出せる万策(ばんさく)が尽きちゃった？」

(※急に押し倒される)

「きゃっ！」

「・・・なっ・・・何よおまえ、急に押し倒してきて!？」

「・・・」

「ははあん、もう責め方が思いつかなくて、レイプでもしようつての？ おまえ、Sの才能がないね」

「・・・」

「したければすれば。・・・ただ私、おまえに犯された所で、『ただの不運な事故』くらいにしか感じないよ」

「犯されて女の心が折れるのは、おまえの妄想の中だけなんだからね」

「・・・」

「そうそう、せめて前戯くらいはちゃんと・・・」

「・・・ひっ!？」

「ちよつ、ちよつとあんた、どこ触ってんのよ!? そこ、違う!!」

「・・・」

「はあっ!? 惚け(とぼけ)ないで、そこお尻の穴でしょ! 言っとくけど私、アナルは絶対NGだから!!」

「・・・」

「M嬢がアナルを拒否するな、って!？ ふざけないで・・・アナルなんて、ルックスを売りにできない底辺嬢が使う場所でしょ!」

「私は黙ってても客が殺到するようなS嬢の卵なのよ、解ってんの!？」

「・・・」

「ちよつと、聞きなさいってば!」

「もう、お尻にローション塗るのやめてよ! やつ、指先入ってる!」

「・・・っ・・・根元まで入れて・・・もう、本気で許さないから・・・!」

(アナルを掻き回す音)

「いひっ!？」

「や、やだ!! お尻の中で指動かさないでよ、ちよつと!!」

「・・・くっ、ううっ・・・うんんぐっ・・・」

「・・・あ、や・・・くああっ・・・!」

「・・・こ・・・ころして、やる・・・この調教期間が終わったら、知り合い中に連絡して、海に放り込んで貰うから!」

「今すぐ指を抜けば、命だけは助けてあげるけど!？」

「・・・」

「いつまでその威勢が保てるか、とはまた・・・言ってくれるじゃない」

「私は生まれつきの生粋のSなの。この性格が変わるなんて事は、万が一にも有り得ないわけ!」

(さらに掻き回す音、連続して)

「・・・んんっ!」

「・・・う、うううっ・・・あ・・・」

「あ・・・あっ・・・うっ、くっ・・・ひう、つく・・・」

「・・・んはあっ、はあっ・・・結局、指は抜かないわけ?」

「おまえって、本当に救いようのないヘンタイね。人のお尻に指入れてて平気なんだ?」

「・・・はっ・・・はあっ・・・そ、そんなに奥の方まで掻き回して・・・馬鹿じゃないの、ホントに」

「・・・うっ!・・・ううんんっ・・・!」

(掻き回す音、終了)

「・・・やっと指を抜いたの?」

「・・・っ!?」

「ちよつと、何持ってたんのよそれ・・・」

「アナル・・・パール・・・?」

「まさか、まさかだけど、そんなものを私に使うわけじゃないでしょうね」

「・・・」

「ふざけないで、いい訳ないでしょ!」

「・・・」

「了承は必要ない、って、おまえ一体何様よ!」

「・・・」

「主人だなんて、認めたつもりないけど!? とにかく、やめ・・・!!」

(挿入音)

「・・・っ!」

「は、話の途中でねじ込むなんて・・・最低・・・!」

「・・・ううう、うああ、ああう、う・・・!」

「・・・」

「今の気分?・・・最悪。普通出すだけの穴にむりやり異物突っ込まれて、不快感しかないんだけど」

「・・・」

「反吐が出るよ、そのニヤけ面(づら)。人として終わってるんじゃない」

(ストローク音)

「・・・くっ!・・・ん、んんああっ・・・」

「・・・あああっ、んんっ・・・!!」

「あ・・・ううう・・・ああああ。あああうっ・・・!」

「・・・引き抜かれる時が、すごい・・・ヘンな感じなんだけど。もう止めてくれない？」

(ストローク音終了)

「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「・・・え？ 一通り慣らしも終わったから、もうアナルセックスしても大丈夫だろう、って・・・？」

「む、無理無理！ それだけは本当に無理っ！」

「・・・」

「どうしても何も、男のアレなんてお尻にねじ込まれたら、拵がっっても閉じなくなるでしょ！」

「他の事だったら何でもしてあげるから、アナルセックスだけはやめよう。ね？」

「・・・」

「・・・うつ・・・ま、まぁ。アナルセックス以外なら・・・別に何だっていいよ。それ以下とか無いでしょ」

「・・・」

「なっ！？」

「じゃあ俺の尻穴を舐めろ、って・・・この私が、おまえの尻穴を・・・？」

「・・・」

「そ、そりゃ、何でもするとは言ったけど！」

「・・・」

「・・・くっ・・・」

「アナルセックスされるか、アナルを舐めるかなんて・・・おまえ、女の子にそんな最低の二択がよく出せるね・・・」

「・・・」

「・・・く、くく、くううつ・・・！！！！」

「あぁもう！ 舐めれば、舐めればいいんですよ、お尻を！」

「・・・」

「舐めたい訳ないでしょ！？ でもアナルセックスなんてしたら、跡がハッキリ残っちゃうし。」

「それなら、死ぬほど・・・本当に死ぬほど嫌だけど、おまえのアナルを舐めるほうがベターなだけ。ベストは、おまえに『良心がある』事なんだけどね」

「・・・」

「ふん、今さら期待もしていないけど。するならするで、さっさと後ろ向いて準備してよ」

「・・・」

「・・・うわっ、気持ち悪・・・。こんなの舐めさせるなんて、どういう神経なの」

「・・・」

「ちよっと、何でそんな事まで言わなきゃいけないわけ！？」

「・・・」
「・・・くっ・・・！」
「・・・お、お尻の穴を、舐めさせていただきます・・・ご主人様」
「・・・」
「何ニヤニヤ笑ってんのよ。馬鹿じゃない・・・」
「・・・れろっ・・・れろ、えろっ・・・」
「れろ・・・ぴちや、ぴちやっ・・・れろ・・・」
「・・・む、ぐっ・・・！！・・・オエッ・・・！！」
「・・・ウツ・・・れろっ・・・」
「・・・おくも、おくもわらひに、こんら・・・ころを・・・！！」
「よくも私に、こんな事を』、と舐めながら言っている」
「・・・れろっ、れろっ・・・あむっ、・・・えろっ・・・」
「れろ・・・ぴちや、ぴちやっ・・・れろ・・・」
「・・・ね、ねえ、もう・・・いいでしょ」
「・・・」
「・・・舌がにがい・・・」
「・・・もう今日はこれで・・・って、きやあっ！？」
「(床に押し倒される)」
「ちよつと、何よ！ 言われた通りしたでしょ、まだ何かあるの！？」
「・・・」
「・・・っ！？ あ、アナルセックスが残ってるだろって、何言ってるの・・・？」
「そのアナルセックスが嫌だから、お尻まで舐めたんじゃない！」
「・・・」
「・・・あれは、どっちが先か決めさせたただけだ？」
「・・・お、おまえ、どこまで・・・どこまで最低な奴なの！」
「・・・」
「やめてっ、本当にやめてっ！ お尻になんて入れないで、ふざけないでよっ！！」
「・・・いつ、いやああああっ！！！！！！」
「(性器挿入&ストローク開始)」
「・・・うゝっ、ううゝっ！！」
「んぐうゝ、あああゝっ！ あああ、あああああゝ うあゝ！」
「・・・いやっ、や・・・あ！ はっ、はあっ・・・お、お尻・・・が・・・あ・・・っ！！」
「・・・あっ、あぐっ・・・んん、ああああ・・・あああっ、う・・・」

「・・・ひぐつ、くう、うつ・・・！ お、おまえみたいな奴に、おしりの穴を・・・
犯されるなんて・・・！」（少し泣きかけている）
「・・・あつ、あつ・・・はあつ、はつ・・・あつ・・・ああああつ・・・！」
「く、うつ！！」（ストローク音終了。腸内で射精されている）
「・・・はあ、はあつ、はあつ・・・や・・・お、おしりの中に、出したの・・・？」
（性器が引き抜かれる）
「・・・い・・・たい・・・抜かれてもまだ、お尻の穴がヒリヒリする・・・」
「・・・」
「あ、明日からも、毎日アナル調教・・・！？」
「・・・おまえ、いつかバチが当たるよ・・・きつと」

5. スパニング

(冒頭からイラマチオ)

「んご．．．んご．．．ぐっ．．．んぶっ．．．」

「．．．おっ、ごっ．．．おオえ、っ、ぶっ．．．ん、っ！」

「．．．げほっ、げほ、えほっ！！！」

「．．．はあ、はあ．．．はあ．．．」

「ちよつと休憩させてよ．．．もう、顎がガクガクなの」

「．．．」

「何泣いてるんだ、って．．．イラマチオの苦しさ知らないから、そんな事言えんのよ」

「喉の奥まで無理矢理突っ込まれて、吐き気堪えるのがどんなに大変か、解ってるの？」

「酸欠で意識は朦朧（もうろう）とするし、大嫌いな男の匂いが鼻の奥にこびり付くし．．．」

「それを毎日、毎日、毎日．．．よくも飽きないもんね」

「．．．」

「苦しんでる顔が最高？　．．．馬鹿じゃないの」

「．．．それより、お腹減ったんだけど。朝から何も貰ってないよ」

「．．．餌じゃなくて、ご飯！　もうあの、精子かけた残飯みたいなのをやめてよ。ただでさえ今、気持ち悪いんだから．．．」

(皿の置かれる音)

「っ．．．！」

「言った傍（そば）から、また．．．！　．．．こんなの、いらない．．．」

(空腹の余り腹が鳴る)

「くっ．．．！」

「．．．この、悪趣味男．．．！」

「はいはい．．．いつものようによつんばいになって食べればいいんでしょ！」

(大食いで貪り食いはじめる)

「はぐっ、あむっ．．．はぐっ．．．く、くうう、うううっ．．．」(口惜しい嘆き)

「．．．」

「．．．う、うう、ひっ．．．ぐ．．．」

「はぐっ．．．はぐ．．．ん．．．ん．．．んぐ．．．」

「ん．．．ん．．．ん．．．んぐ．．．」(嫌そうに飲み込む)

「わ、私にここまで惨めな真似させた事．．．よく、覚えときなさいよ」

「．．．おまえには、絶対、これ以上の事をやり返してやるんだから．．．！」

「はぐっ・・・はぐ・・・ん・・・ん・・・んぐ・・・」

「ん・・・ん・・・ん・・・ん・・・」

「・・・」

「・・・うえっ・・・ご、ごちそう、さまでした・・・大変『まずかった』です」

「・・・」

(頬を張る音)

「つつ・・・！」

「また暴力・・・正直に言っただけなのにさ」

「・・・」

「食休みも挟まずに、またするの？ ホント、とことん人権を認めてくれないんだね」

「ちょ！何よっ！どこさわってんのよっ！」

(指でまさぐる)

「ん、うっ・・・！」

「・・・う、あっ・・・あっ、ああっ・・・あ、はあっ・・・あ、あっ・・・！！」

「・・・え？ もう、膣内（なか）が濡れてる、って・・・？」

「て、適当な事言わないでよ。だって今日は、朝からあんたの唾えさせられて、犬の餌食べただけじゃない」

「・・・そんなの、濡れるわけが・・・」

(指でまさぐる、湿り気がある感じ)

「・・・なっ・・・！ そんな・・・嘘、嘘よ！！」

「・・・あっ、ああっ、くあっ・・・！！ そんなに激しくかき回さないで・・・今そこ、弱くなってるからっ・・・！」

「あ、あ！ ああ・・・あっ・・・はああっ・・・！」

「やだ、やだっ！ な、なんで・・・足の先まで、ビリビリ・・・気持ちいいのが！」

(ひっぱたく音)

「きゃあああっ！？」

「い、痛いっ！ ちょっと、あそこいじってる最中にお尻叩かないでったら！」

「・・・」

「これが感じるんだろ、って・・・そんなわけ・・・」

(再びひっぱたく音)

「ああああっ！」

「・・・や、やめ・・・やめ、て・・・！」

おしり叩かれると、あそこが勝手に締まって・・・すごい、来ちゃう・・・！
はああっ、あああっ・・・あ、あああうっ・・・！」

(まさぐる音一旦終了)

「・・・はあっ、はあっ・・・はあっ・・・!」

「・・・何よ、その顔・・・イッたから、それが何?」

「・・・え? 『まだまだイカせてやる』・・・?」

(再びひっぱたく音、さらに激しく指で責める)

「あああっ!」

「・・・あうっ、あっ・・・あっ、あはっ・・・」

「く、ううっ・・・ああっ・・・あ、あああっ・・・!」 (※苦しみながらも快感を堪えきれない様子)

「・・・はあっ、はあっ、はっ・・・い、いくっ・・・いく、うっ・・・!」

「ひいっ!・・・いくっ!いくっ!いくっ!いくっ!」

「いぐうううううううううっ!!!」

(潮を吹く。スパンキングここまで)

「・・・はーっ・・・はーっ・・・はーっ・・・」

「・・・うっ・・・うっく・・・ひぐっ・・・」

「やだ、やだよこんな・・・お、お尻叩かれながら、イカされるなんて・・・!」

「私の体・・・もう本当に、おかしくなってる・・・」

「・・・ひっ!?!」

「・・・な・・・い・・・入れるの・・・? しかもそこ、お尻の穴だよ・・・?」

「もお、もお・・・やだよ・・・うううっ!」

(ストロークの音)

「うっ・・・うっ・・・うっ・・・うっ・・・!」

「そ、そんな深く、いやっ・・・蕩(と)けた子宮が、裏側から突き上げられてっ!」

「・・・ん、っ・・・また、イクっ・・・お尻の穴なんかでイカされ・・・ちやうっ!」

「あ、ああ、っ! んああああ、ああっ・・・!」

「んあ!・・・あんっ!・・・あんっ!」

「はあはあはあはあ」

「やだっ!・・・いくっ!・・・いくっ!」

「あっ! あっ! あっ! あっ! あっ!」

「ああっ! ああっ! いくっ! いくっ!」

「いくっ!・・・いくいくっ! あっ! いくっ!」

「はあはあはあはあ」

「あんっあんっあんっあんっ」

「や、やだ!・・・んんっ!んあっ!いくっ!いくっ!」

「いくいくいくっ!あっ!いくっ!いくいくいくいくいく!」

「やああああああああああああああああ!」

(射精音)

「ああ・・・ああ・・・ああ・・・」

「はぁ・・・はぁはぁ・・・はぁはぁ・・・」

「はぁはぁはぁはぁ・・・はぁはぁはぁはぁ・・・」

「はぁはぁはぁはぁ・・・はぁはぁはぁはぁ・・・」

(フェードアウト)

「……ご主人……さま」

「……ねえ、聴こえてるんでしょう。ご主人……さま」

「……」

「お腹がすいたの。ご飯……あ、餌を、ちょうだ……く、下さい」

（皿が置かれる）

「……」

（犬食い）

「……はぐつ、あむつ……あぐつ……じゅるるつ……」

「はぐつ……はぐ……ん……ん……んぐ……」

「ん……ん……ん……ん……」

「……はぐつ、じゅるるつ……あぐつ……じゅるつ……」

「ん……んぐ……ん……ん……ん……」

「ん……」

「……」

「げほつ、おえつ……ごちそうさま……でした」

「……」

「今日は、すぐに犯さないのね」

「……」

「……え、今日は外に出掛けるの？ 野外調教……？」

「……ふん。別に怖くなんてないけど。くれぐれも、警察の厄介になるようなヘマはしないでよね」

「ああ……はいはい、縛るのね……その後、そのコートを着せるのね……」

（場面が切り替わる）

「ちよつと、どこまで行くの……？ 目隠しされてて見えないから、あまり引っ張らないでよ！ 危ないじゃない！」

「……」

「え、ちよつと目的地に着いた、つて……？ どこの、ここ」

「……」

「公園？ ……人はいないんでしょうね」

（コートを脱がせ、目隠しと縄だけの姿に）

「きゃっ！？ 何脱がしてるのよ！ こ、こんな、外で！」

「ちよつと！ 目隠しされているから分からないけど、周りに人いないんでしょうね！」

(秘裂を指で刺激し始める。湿ったような音)

「・・・ちよつと、どこ何触ってるの!?? やめてよ、誰か通ったらどうすんのよ!??」

「・・・あ、あつ・・・!・・・ホントやめて、ったら・・・!」

「ん、んんっ・・・!」

「・・・はっ・・・はあっ・・・はあ、はあっ・・・」

「・・・」

「凄く濡れてきた、って、そんな・・・」

「・・・はあ・・・はあ・・・」

「・・・こ、こわい、よ・・・こんな所、誰かに見られたら・・・わ、私・・・!」

(背景からかすかにざわめきが聴こえ始める)

「っ!??」

「えっ、ちよ、ちよつと待って! 誰かいるんじゃないの、周り!??」

「・・・」

「なっ・・・!?? こ、この公園が、有名な野外調教スポット、って・・・!」

「ふ、ふざけないでっ! コート着させてよ、裸見られてるのよ!」

「しかも、一人や二人なんかじゃない・・・いっぱいいるでしょ・・・」

「・・・」

「見せてやれって、あつ、あつ・・・じよ、冗談やめてよ!」

「・・・」

「やだっ! お願い! コートを着させて!」

(挿入。ストローク音開始)

「くううっ! ほ、本気でセックスする気!?? こんな・・・人前で!」

「・・・」

「・・・あつ、あつ・・・ああつ・・・くう、あ・・・あ・・・あああつ!」

「いや、いや・・・いやいやいやあつ! なんで・・・なんで私、こんなに感じ・・・て」

「・・・」

「やだ・・・脚持ち上げないで! 力入んなくて、木に捕まってるのがやつとなの」

「そ、それに・・・それに、大股開いたあそこが、みんなに・・・!」

「・・・」

「いやあつ、言わないでっ!」

「私は、エッチなお汁なんて出してない! こんな・・・こんな状況で興奮するような変態じゃない!」

「はっ・・・はあっ・・・抜いてよ、もう抜いてっ! っ・・・はあっ・・・抜き、なさいよっ!」

(ストローク音一旦終了)

「・・・そうよ。もういい加減、遊びはおしまいに・・・」

（アナルに再び挿入される）

「うあゝっ！？」

「あ・・・お尻に・・・」

（ストローク音開始）

「い、いやああああっ！ 見ないで、見ないでえええっ！！」

「これは、違うの！ こいつが勝手に、ヘンな所に！」

「私は、こんな・・・お尻を犯されるような女じゃないの！ 安い女なんかじゃないの
おっ！！」

「・・・」

「・・・やめて・・・何？ 何よ・・・もしかして笑われてるの？」

「・・・あ、あ、あっ・・・わ、私は、M嬢なんかじゃない・・・笑われる側の人間じゃ
・・・ない・・・」

「・・・」

「・・・うつ、うつ・・・ぐすっ・・・ひぐっ・・・」

「・・・どうして・・・どうして、みんな笑ってるの・・・？ 今の私は、そんなに惨
めなの・・・？」

「・・・はあ、はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・！！」

「・・・こんなで感じるなんて・・・あるわけない・・・あるわけ、なかったの
に・・・！！」

「どおして・・・お尻の穴が勝手にヒクついて、奥がうねってるの」

「子宮が今までにないくらい蕩（と）けて・・・我慢できないくらい、熱いの・・・」

「・・・これが・・・こんなのが・・・わ、私なんて・・・」

「・・・」

「・・・あはっ・・・」

「・・・」

「もう、いい・・・」

「もう、笑われても、いい・・・もつと、もつと気持ちよく・・・なりたいよ・・・」

「・・・」

「ご・・・ご主人、様・・・お願いです・・・！！」

「もっと、私を善くして下さい・・・公衆の面前で、私のお尻を、ぐちゃぐちゃにして
下さい・・・っ！！」

（ストローク音、さらに過激に）

「・・・あっ、ああっ、くわあああああゝあゝっ！！」

「あああっ、すごい、すごいっ！！ ご主人様あっ、すごい、凄いですうっ！！

「あゝ・・・あああゝっ、んんあああああおおお、おっつつっ！！！！」

「お尻がきもちいのおおおお」

「すごい！すごいの！ああああああああああっ！」

「いくっ！いくっ！お尻でイカされる！！！」

「みんなにお尻でイカされてるところ見られてる！！！」

「あひいひいひいひい！もっど、もっど見てください！」

「わたしお尻を犯されてよがってますうううううう」

「あひっ！ あひっ！ みられてっ！ 惨めなところを見られてっ！ ひいひい」

「きもちいいいい！ もっど、もっど惨めな私をみてええええっ！」

「あひっ！ あひっ！ はあああ．．．ひいっ！」

「すごい！ すっごいの！ 頭真っ白！ なにも考えらんないっ！」

「ひっ！ ひっ！ あっいつ！ おしりが！ おしりがっ！ ああっ！」

「いぐっ！ いぐっ！ いぐっ！ いぐっ！」

「あひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい！！！」

(射精音)

「ああっ！ あっ！ ．．．あっ．．．ああ．．．」

「はあ．．．はあああ．．．はあああ．．．」

「あは．．．」(以下弱々しく笑い続ける)

「あはは．．．あははは．．．」

「あははははははは．．．」

「あははははははは．．．」

「あははははははは．．．」

(フェードアウト)

放置プレイ1

(ローターの音フェードイン)

「・・・んっ、はあっ・・・はあっ・・・んっ・・・あっ・・・」

「・・・いつまで、そうして見てるつもりなの？」

「こんな恥ずかしい格好で身動きとれないように縛って・・・」

「私のおっぱいもおまんこも、あんたに丸見えとか反吐がでるわね」

「まさかこの前のあれで、私が見られて感じるタイプだと勘違いしちゃった？」

「ざーんねん。同じ見られるのでも、ブタ相手だと興奮はしないんだよね、人間って」

「それよりさあ、ちよつと背中の中の真ん中の辺りが痒いんだけど、掻かいてくれない？」

「あと、このクリトリスのローターも背中搔くついでにとつてよ」(強がっている)

「当然解ると思うけど、私、動けないんだよね」

「・・・」

「・・・え？ それは良かったなって、ちよつと？」

「言葉が理解できなくなっちゃったのかなあ、もしもーし」

「・・・」

「・・・ちよつと、そっちは出口でしょ。何やってんのよ」

「・・・」

「・・・ま、まさかあんた、私をこのまま置いていくつもりじゃないでしょうね」

「・・・」

「・・・はっ？ ふ、ふざけないでよ！」

「・・・」

「何が放置プレイよ、置いていっていい状況じゃないでしょ！」

「じゃあ、トイレ行きたくなったらどうすればいいのよ!？」

「・・・」

「垂れ流せばいいって、このっ・・・!」

「・・・ちよつと、聞きなさいってば！ ちよつとっ!!」

(ドアの開まる音)

「まさか、本当に・・・!？」

「やだ、悪い冗談やめてよ、聞こえてるんでしょ？」

「・・・そ、そうだ、おまえ、ご主人様気取りなんだよね。主人には、ペットの世話を
する義務があんのよ!？」

「男ならちゃんと戻ってきて、義務を果たしたらどうなの!？」

「・・・」

「・・・いや、何よ・・・こんなの本当に、おしっこも出来ないじゃない・・・」
「・・・せめて、クリのローター取って行つてよ・・・」

「こんな、ずつと刺激が来る状態で・・・いつまでも、放置しないでよ・・・」
「・・・」

「・・・はあっ・・・はあ、はあっ・・・ああっ・・・はあ・・・はっ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

「んぐっ・・・はあはあ・・・はあはあ・・・」

「くそっ・・・はあはあ・・・はあはあ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

(フェードアウト)

(フェーイン)

「・・・はーっ、はあっ・・・はっ・・・はあっ・・・あああ、あっ・・・はあっ、あ
っ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

「・・・いい加減・・・早く帰ってきて・・・」

「・・・はあっ・・・はあっ・・・」

「どれくらい経ったんだろ・・・もう、10分くらいかな・・・」

「・・・はっ、はっ・・・汗がひどい・・・早くシャワー浴びたい・・・」

「・・・あいつ、何してんのよ・・・優雅にビールでも呑んでたら、首絞めてやる」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

「はーっ、はーっ・・・んぐ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

(フェードアウト)

(フェーイン)

「・・・あっ、あっ、ああっ・・・はあっはあっはあっ・・・はーっ・・・はー
っ・・・あっ」

「あぐ・・・ああ・・・ああっ・・・」

「はあはあ・・・」

「早く・・・早くっ、はやく帰ってきて・・・!」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ・・・」

(ドアが開く音)

「っ！」

「・・・ふ、ふん。おまえのブサイク面でも、久々に人の顔見ると安心するもんだね」

「はあはあ・・・」

「き・・・気分はどうか、って？・・・はあはあ」

「こうして、自分の汗の匂いが充満してる環境を考えれば・・・」

「あつ、おまえは何だか興奮しそうだねえ、つくづく頭のおかしい変態だから」

「はあはあ・・・」

「何よ。私にこんな事までして、後で・・・っと、違う違う」(「後で仕返ししてやる」と言おうとした)

「私、ここに1人置いていかれた後で、色々考えたんだよ。何でこんな事するのか、って」

「おかげさまで、考える時間はたっぷりあったからね」

「はあはあ・・・」

「そう、結論が出たの。おまえ、今さらながらに怖気づいてるんでしょ」

「2週間って調教期間の期限が刻一刻と迫ってきて、でも私はこうしてシャンとしてる」

「このままじゃ2週間終わったら後に、私にひどい報復をされるかも、って」

「だからこうして、私を弱らせる事で譲歩を引き出そうってんでしょ」

「いかにもおまえみたいな、小心者の小物が考えそうな事だよ」

「はあはあ・・・」

「まあ、私も鬼じゃないからさ。おまえのその必死さに免じて、報復を緩めてあげるよ」

「された事を全部そのまま話したら、私のファンがおまえの歯を一本残らず叩き折るだろうけどさ・・・」

「それを多少はおまえをフォローする形で話してあげる。ちよつと興奮しすぎただけみたい、ってね」

「どう、いい条件でしょ？」

「はあはあ・・・」

「解ったら、私の気が変わらないうちに拘束を解いて」

「それから、汗かいちゃったからシャワーね。あと、冷たいレモネードも用意していいよ？」

「はあはあ・・・」

「ちよつと、何突っ立つてるの？ はやく・・・」

「はあはあ・・・」

「え？ ちよつと様子を見に來ただけだ・・・？」

「・・・お、おまえ・・・何、言ってるの・・・？」

(ローターの音が大きくなる)

「ひっ!？」
「ちょ、ちよつと! ローターさつきより強くして、何考えてんのよ!」
「うぐ・・・もう・・・これ無理なのに・・・」
「はあはあ・・・」
「な、何よ、そのクリップ・・・まさか・・・」
「え・・・ちょ・・・」
「ひぐつ!・・・乳首が・・・乳首がちぎれるっ!」
「痛いっ! 痛いよっ! ちよつと! 痛いって!」
「うう・・・早く・・・早くとつて・・・」
「はあはあ・・・」
「えっ!・・・なっ・・・クリップにローターを・・・」
（ローターの音追加）
「ひいいいっ!・・・くっ・・・くう・・・くそっ・・・」
「おまえ・・・覚えてろよ・・・」
「ぐっ・・・うぐ・・・うう・・・」
「・・・ひっ!・・・な・・・何バイブ持ってるのよ・・・」
「くっ・・・嫌よ・・・そんな太いバイブ・・・入れないでよ!」
「やだ!・・・足広げないで!」
「やっ! やだっ! やだっ! やだっ! やだっ!」
（ぐちゅ）（バイブが挿入される）
「うぐっ・・・うう・・・ぐっ・・・」
「はあはあはあ・・・な・・・何?・・・まだなんかあるの・・・?」
「えっ・・・ちょ・・・ちよつと・・・もう一本取り出して・・・」
「まさか・・・そんな・・・そんな太いのを・・・」
「駄目っ!それだけは本当に駄目!もう無理だから!これ以上はもう無理だからっ!」
「いやっ!いやっ!」
「いやいやいやいやいやいやいやひぐつ!」（後に挿入される）
「・・・く、ふ、深いし・・・おしりが・・・くっ・・・こんなの・・・!」
「はあはあ・・・」
「殺す・・・殺す・・・」
「殺す殺す殺す殺す・・・殺してやる・・・殺してやる・・・」
「っ!?? ちよつとあんた、こんな、さつきより酷い状態にしたまま、またどこか行くの!??」
「はあはあ・・・」

「悪いか、つて・・・悪いに決まってるでしょ！　自分がされた場合を考えてみなさいよ！」

「誰もいない部屋で、身じろぎも出来ないで性器を刺激され続けて・・・」

「頭がおかしくなりそうっていうのが、解んないの！？」

「はあはあ・・・」

「ご愁傷様、じゃないでしょ！　ちよつと、本当に置いてくの！？」

「じゃ、じゃあせめて、どのくらいで戻ってくるのか教えて」

「いつまで耐えればいいのか解るのと解らないのとじゃ、全然違うから」

「戻る時間さえ教えれば、外で待ってていいよ。自由に待たせたげる。・・・ねえ？」

「はあはあ・・・」

「さ、30分後・・・ね。解った。じゃあ何か、時計でも置いてってよ」

「ここって時計がないんだよね」

「はあはあ・・・」

「・・・腕時計・・・見にくいけど、まあいいや。」

「じゃあ、30分後ね。1分でも遅れたら、承知しないから！」

（ドアの閉まる音）

「・・・はあ、はあっ・・・さ、30分くらいなら、別に・・・」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「うぐ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

（フェードアウト）

(フェードイン) (以降荒い息使い)

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「うう・・・」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「・・・ふーっ、ふーっ・・・はあっ・・・ま、まだ、5分・・・？」

「さっさと過ぎてよ・・・」

「ああもう、あそこお尻の奥でバイブがうねって・・・」

「・・・もう本当に、うっさいなあ・・・!!」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

(フェードアウト)

(フェードイン)

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「あっ、ああっ、はあっ・・・い、今、何分・・・？」

「はあはあ・・・」

「えっと、じゅ、15分・・・半分・・・か」

「ま、まだ半分・・・」

「・・・ち、違う！ 何グズみたいな発想してんのよ！」

「・・・も、もう半分も過ぎたんだから、ら、楽勝。もう半分で、終わり・・・」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

(フェードアウト)

(フェードイン)

「はあっ・・・はあ・・・はあっはあっ・・・」

「はあはあ・・・はあっ・・・はあっ・・・」

「はあっ、はあっ、はあっはあっ・・・はあっ・・・!!」

「あ・・・あと・・・1分・・・はあ、はあ・・・ふふ、思ったよりは長かったな」

「あの馬鹿にしては、結構“くる”責めだったじゃん・・・」

「はあはあ・・・」

「乳首も、クリも、あそこもお尻も・・・こんなに開発されてたんだって、悔しいけどわかつちやった」

「ああ、もう・・・足がガクガク・・・1人じゃ立てそうもないや」

「はあはあ・・・」

「ふう、ふう・・・こうして待ち望んでると、時間経つのが遅いもんね・・・」

「でも、もうちよつと・・・はあはあ・・・もうちよつとだから・・・、

あ・・・あと・・・」

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・」

「はあはあ・・・」

「はあはあ・・・」

「・・・おかしいな・・・30分経ってるんだけど・・・」

「はあはあ・・・」

「まさか、時計ちゃんと見てないんじゃないでしょうね」

「あーあ、ボケつと待ってる側は気楽でいいよ。こっちはずつと時計と睨めっこだったのにさ・・・」

「・・・まあ、そのうち気付くでしょ」

「そうだ。この遅れた時間分だけ、後の復讐割り増ししよつと。あー大変」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

「うぐ・・・」

「はあはあ・・・はあはあ」

「はあはあ・・・はあはあ」

（フェードアウト）

（フェードイン）（以降激しい息使い）

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「んっ・・・はあはあ、ふーっ・・・はあっ！・・・はあっ！はあっ・・・」

「・・・じゅ、10分も過ぎるなんて・・・あいつ、ふざけてんの・・・」

「じ・・・時間守らない男なんて、最低・・・さすが、童貞臭いだけの事はあるよっ」

「・・・」

「あ・・・ああ、もうっ・・・はあっ！はあっ！・・・はやくしてよ・・・いつまで、こんな・・・！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「んぐっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

（フェードアウト）

（フェードイン）

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「あっ、あっ・・・つく、うぐっ・・・つく、ふぐっ・・・あっ、っは・・・！！！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「あっ・・・あれっ・・・からっ・・・また30分・・・」

「い・・・1時間もっ・・・このままだったなんてっ・・・」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「も・・・もう、時計見逃しな訳ない。あいつ・・・」

「わざとだ・・・はじめから時間守る気なんて全然無かったんだ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「ゆ、許せない・・・いくらSMプレイの主人だからって、こんな事・・・！」

「もし私が脱水症状とかで倒れたら、どうするつもりよ・・・」

「嫌がらせにしたって、限度つてもものがあるよ・・・もういいから、早く戻ってきてよ・・・！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「んんっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

（フェードアウト）

（フェードイン）

「はあっ・・・はあっ・・・あうっ・・・はうっ・・・」
「はああっ・・・はっ！ はっ！ ・・・はうっ！」

「・・・あつ、あうっ・・・うっ・・・はあつ、あうっ・・・」

「も・・・もう、限界・・・はあっ・・・もう・・・おかしくなりそう・・・」

「に・・・2時間も過ぎるなんて、あ・・・ありえないよ・・・」

「はっはっ・・・ねえ・・・ねえ。・・・どこかで見てるんでしょ？」

「はあ・・・はあ・・・そんなに、苛めたいぐらい、私生意気だった？」

「・・・ううん、解ってる・・・くっ」

「生意気だったけど・・・謝るから。・・・ごめんなさい・・・んぐっ」

「・・・ねえ、ちゃんと聴こえてるんでしょ。ちゃんと、伝わったでしょ・・・」

「はっ・・・はっ・・・惨めって、思われてもいいよ・・・」

「2時間もこんな状態で放置されたら、惨めにもなるよっ！」

「・・・うっ・・・うっ・・・はっ、はあっ・・・ぐすっ・・・うっぐ」

「・・・はやくもどつてきて・・・」

「はうっ・・・あぐっ・・・はっはっはっはっ・・・」

「はぐう・・・うう・・・はあっ・・・はあっ・・・」

「んあっ・・・あっ！ ・・・あっあっあっあっあっ！」

「んあっ！またいぐ・・・いぐ・・・いぐ・・・」

「んんんんんっ！」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「んぐっ・・・はっ・・・はっ・・・はっ・・・」

「はあっ・・・はあっ・・・あうっ・・・はうっ・・・」

「はああっ・・・はっ！はっ！はっ！はうっ！」

(フェードアウト)

(フェードイン)

「・・・うっ・・・ううっ・・・あつ、あつ・・・あつ・・・」

「あっあつあつあつ・・・いぐ・・・いぐ・・・」

「くっ、ううっ・・・ああっ・・・あう、うっ・・・はっ・・・」

「あ・・・あ・・・あ・・・」

「く・・・クリが、もう・・・おかしくなってるよ・・・」

「ずっと、ずっと、ローターで刺激されっぱなしだもん・・・」

「あへ・・・」

「3時間・・・3時間もだよ？」

「・・・ギチギチに硬くなって・・・痛いのか熱いのかももうわかんないのに・・・」
「勝手にびくんびくん動くよ・・・あひ・・・あひ・・・」
「男の子ならこういう時、射精して楽になれるのかなあ・・・ねえ、そうなの・・・？」
「・・・はあっ・・・はあっ・・・あえっ？」
「・・・ああっ、あっ・・・そうだ・・・いないんだ・・・」
「もう、ずっと、ずーっと・・・ひとり・・・この、自分の汗と愛液だけの匂いの部屋で、ずーっと・・・」
「ひとりでいきっぱなし・・・はひ・・・はひ・・・」
「ま・・・前は、あ、あの声・・・聞くだけで、イライラしたのに・・・」
「・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっはあっはあっ・・・」
「・・・あっ、あああっ・・・いくつ、またっ・・・いっちゃうんだ・・・もう、いやなのにいっ・・・!!」
「はひい・・・あっ・・・あっあっあっあっ・・・」
「あひっあひっ！いぐっ・・・いぐ・・・いぐ・・・いぐいぐいぐ・・・」
「はひいひいひいひいひい・・・」
「あへ・・・あへ・・・あは・・・」
「あっ・・・あっ・・・あっ・・・あっ・・・」
「くっ、ううっ・・・ああっ・・・あう、うっ・・・はっ・・・」
(フェードアウト)

「あ．．．あふ．．．あっ．．．あっ．．．」

「はあっ．．．はあっ．．．あっ！．．．あっあっ．．．」

「あぐ．．．はひ．．．」

「あ．．．あっ．．．ああ、ああいぐっ．．．あ．．．」

(ドアが開く音)

「あ．．．ああっ．．．あひっ．．．あひっ．．．」

「．．．も．．．もどつて．．．もどつて．．．きた．．．た．．．たすけ．．．たすけて．．．」

「も．．．もう無理です．．．限界です．．．」

「よ．．．4時間．．．4時間もたえました．．．」

「は．．．はやく．．．はやくとめて．．．おかしくなっちゃう．．．」

「はっ．．．はっ．．．」

「な．．．何でもしますから．．．お願いですから．．．とめてください．．．」

「はっ．．．はっ．．．」

「．．．ふえ？」

「ど．．．奴隷として、ずっと従うか．．．？．．．ですって．．．？」

「は．．．ふあい．．．もちろんです．．．ずっと、ど．．．奴隷としてつかってください．．．」

「はっ．．．はっ．．．」

「に．．．肉便器として．．．いつ．．．一生をすごすか．．．って？」

「も．．．もちろんです！　なります！　なります！」

「ずっと．．．ずっと．．．あなたさまの肉便器として、どうぞお使いください．．．」

「はっ．．．はっ．．．」

「あ．．．あの．．．と、とめていただけませんか．．．？」

「な．．．なんども申し上げて．．．わずらわしいかも、しれませんが．．．ほ、ほんとうにつらいんです．．．」

「はっ．．．はっ．．．」

「．．．えっ．．．し、しつもん answered たら、とめる．．．？」

「．．．はひ．．．な、何でもお答えします．．．だから．．．はやく．．．はやくう．．．」

「はっ．．．はっ．．．」

「な．．．何回いったか．．．って．．．？」

「．．．え、えっと．．．た．．．たくさん．．．たくさんイきました．．．」

「はっ・・・はっ・・・」
「かずを言えって？・・・わ・・・わかん・・・ない・・・」
「たくさんですっ！1分ごとにイッてますっ！」
「ほらっ・・・いまも・・・あっ・・・あっあっあっあっ」
「いぐ・・・いぐの・・・あっあっあっあっ・・・あああああっ！」
「ひ・・・ひゃっかい・・・ひゃっかい以上イッてまふ・・・はひ・・・はひ・・・」
「はっ・・・はっ・・・」
「ち・・・ちくびはどんな感じかって？」
「クリップ挟まれて・・・はじめは・・・すごく痛かったけど・・・」
「振動が乳首に伝わって・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・何度も・・・何度もイッてるうちに、どんどん敏感になって・・・」
「垂れ下がってるローターが・・・揺れるたびに電気が走るの・・・」
「だから・・・ローターが揺れないように・・・じつと・・・じつと動かないようにしてるのに・・・」
「はうっ！・・・また・・・体がびくってなっ・・・」
「はっ・・・はっ・・・」
「乳首から・・・乳首から全身に電気をながしてくるの・・・」
「はあっ・・・はあっ・・・」
「・・・お・・・おまんこ・・・？・・・おまんこはどうなっているかって？」
「はあ・・・はあ・・・」
「ずっと・・・ずっと太いのが暴れてるんです・・・」
「な・・・中から・・・んぐ・・・中から私を壊そうとしてるんです・・・」
「わたし何も出来ないのに・・・動けないのに・・・許してくれないんです・・・」
「ずっと・・・ずっと暴れまくって・・・わたしを子宮から壊そうとしてるんです・・・」
「お・・・おまんこの中を暴れ回って・・・わ・・・わたしのGスポットに何度も・・・何度もぶつかってくるの・・・」
「はぐっ・・・あ・・・あたるたびに・・・か・・・体がびくってなるの・・・」
「はっ・・・はっ・・・んぐ・・・」
「はっ・・・はっ・・・」
「あ・・・アナル・・・？・・・アナルはどうかって？」
「あついの・・・お尻の中がすごく熱いの・・・」
「お・・・お尻の中でもすごく暴れてて・・・じんじんするの・・・」
「あっ・・・あっ・・・」
「お・・・お尻のバイブと・・・おまんこのバイブが・・・はっ・・・はっ・・・」
「どっちも、すっごくあばれてて・・・」

「ときどき．．．ときどきね．．．わたしのお肉をはさんでぶつかの．．．」
「そ．．．そうすると．．．はあはあ．．．」
「はひひひひひひっ！」
「あっ！あっ！．．．い．．．いま．．．いまぶつかった．．．」
「あ．．．あたま．．．あたままっしろになるの．．．」
「はひっ．．．はひっ．．．」
「はあ．．．はあ．．．」
「く．．．クリトリス？．．．クリトリスの感じね．．．」
「い．．．いちばんすごい．．．ここがいちばんすごい．．．」
「わ．．．わたしの体の全部の感覚がここに集中してるの．．．」
「ずっと．．．ずっと私のクリトリス虐められて．．．はうっ！」
「おかしくなってるの．．．」
「ずっと．．．ずっと虐められてて終わりがないの．．．」
「う．．．動けないし．．．腰に力を入れても．．．体をひねろうとしても．．．どうしても助からないの．．．」
「意識がクリトリスに全部もっていかれて．．．」
「な．．．なるべくクリトリスに意識しないようにしようとしても．．．ローターの振動が許してくれないの」
「ローターに逆らえないの．．．ローターにおもちゃにされてるの．．．」
「ローターが私に『イケっ．．．イケっ．．．』って責めてくるの．．．」
「あっ．．．あっ．．．ずっと同じ強さで責め続けるの．．．」
「あっ．．．あっあっあっ．．．逆らえないの．．．この振動に逆らえないの．．．」
「あっあっ．．．また．．．いぐ．．．いぐついぐっ．．．いぐっ．．．いぐっ．．．」
「はひひひひひひひひひひ．．．」
「い．．．い．．．ああ．．．いったのに．．．いったのに．．．まだ許してくれない．．．」
「許してくれないのお．．．」
「助けて．．．助けて．．．」
「はあっ．．．はあっ．．．」
「へっ．．．し．．．しつもんはコレで．．．全部．．．？」
「あ．．．あはっ．．．はあ．．．はあっ．．．やっ．．．やっ．．．やっ．．．と解放される．．．！」
「はあっ．．．はあっ．．．」
「へ．．．あっ．．．えっ？ あ．．．あの．．．ちょっと．．．どこへ？」
「はあっ．．．はあっ．．．」
「えっ．．．ええええっ！ ま、また、30分後に戻る．．．って．．．？」

「う・・・うそ・・・」

「・・・えっ、えっ、でもあの、いつもん・・・ほら、ちゃんと・・・答えたし・・・」

「そ、それに・・・前も30分って言ってたのに・・・30分じゃなかったよ？」

「・・・私、何時間も放つとかれたんだよ？」

「はあはあ・・・そ・・・その上、また30分とか・・・ねえ？　ねえ？　『冗談でしょ』

「はあっ・・・はあっ・・・」

「ふ、ふざけないでっ！・・・はあはあ・・・こ・・・これがどれだけしんどくてかわ
いか、わかってないの！」

「も・・・もおいやなの・・・ほんとうにこれ嫌なおっ！！」

「はあっ・・・はあっ・・・」

「ええっ！？・・・案の定本性でたな、って、これは・・・ちがう・・・ちがうよ
お・・・！」

「おねがい・・・おねがいしますっ、助けてください！」

「もうこれ以上は、ほんとうに耐えられない！」

「さっきあなたが戻ってきたの見た瞬間、ぷっつりいったの。たすかった、これでかろ
うじて死なずにすむって・・・」

「・・・だからいまから、また続くなんて・・・私、こわくて・・・とてもたえられそ
うにない・・・」

「・・・ほんとうに何でもします。あ、あの、勿論、この調教が終わっても、もう復讐
とかしません」

「口約束だけじゃなくて、お望みなら念書も書きます！」

「なんでもしますっ！　奴隷にもなります！　肉便器にもさせてください！　私をゴミ
のように扱ってかまいません！」

「はあっ・・・はあっ・・・」

「だから・・・」

「はあっ・・・はあっ・・・」

「あっ・・・いやあっ、きいてっ、きいてくださいっ！！」

「お願いします！」

「あなたを心の底から愛します、あなただけの所有物になりますっ、だからっ！！」

「お願いしますっ！　お願いしますっ！　お願いしますっ！　お願いしますっ！」

「お願いしますっ！　お願いしますっ！　お願いしますっ！　お願いしますっ！」

(ドアの閉まる音)

「あ・・・あ・・・」

「あはっ・・・うそ・・・うそよ、こんな・・・こんなの、あるわけないよ・・・」

「そうだ、これ・・・夢だよ・・・。ぜんぶ、ぜんぶぜーんぶ・・・おかしいところは
ぜんぶ、ゆめ・・・」

「・・・あっ・・・あ、ああっ・・・はっ、はあっ・・・」 「う、うっ・・・ぐすっ、ひぐっ・・・ゆ、ゆめなら・・・ほんとにゆめなら、もうい かなくていいのに・・・」 「・・・はあ、あっ・・・はあ、はーっ・・・はあっ・・・」 「・・・はーっ・・・はーっ・・・はあーっ・・・!」 「・・・ぜんぶ・・・そうだ、ぜんぶ、わたしがわるいんだ・・・」 「わたしがあんなだったから、こうなっちゃった・・・だったらもう、わたしなんてい らない・・・」 「これからは、しあわせになれる・・・あのひとにかわいがってもらえるような、人間 に・・・」 「あひっ・・・あひひ・・・あへ・・・あひひ・・・」 「あへ・・・あへ・・・はひ・・・」 「はひ・・・あっ!・・・あっあっあっあっ」 「あひっあひっあひっあひっあひっあひっ」 「あひっあひっあひっあひっあひっあひっ」 (フェードアウト)		10. 墜ちた奴隷
(非公開)		
11. おまけトラック 狂った奴隷		
(非公開)		